



デイリー・ジーザス・ニュース #317

金曜日...苦悩と贖罪の日

イエスの三段階のローマ裁判

ピラトがイエスと二度目の面会を行う

ヨハネ19.7-12

=====

7ユダヤ人の指導者たちは、
私たちには律法があります。その律法によれば、彼は死ななければなりません。なぜなら、彼」
は自分を神の子としたからです」と主張しました。

8ピラトはこれを聞いてますます恐れ、9宮殿の中に戻って行きました。

「あなたはどこから来たのですか」と彼はイエスに尋ねたが、イエスは何も答えなかった。

10ピラトは言った。「あなたは私に何も話さないのか。私にはあなたを解放する力があり、また
私を十字架につける力もあることを知らないのか。」

11イエスは答えられた。「もし上から与えられていなかったら、あなたは私に対して何の権威も
持っていなかったでしょう。ですから、私をあなたに引き渡した者の罪はもっと大きいので
す。」

12それからというもの、ピラトはイエスを釈放しようと努めたが、ユダヤ人たちは叫び続けた。
「この男を釈放するなら、あなたは皇帝の味方ではない。王を自称する者は、皇帝に公然と反対
することになる。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = ^{MT}、マーク
= ^M、ルカ = ^L、ヨハネ = ^J、使徒行伝 = ^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字
が現れるまでその聖書を識別します。さらに、**赤いイタリック体はイエスの言葉を示します**。旧約聖書
の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	プラエトリウム: エルサレムのピラトの宮殿
タイムライン	4月上旬 (39ヶ月目)
イエスの生涯の文脈	第8段階: 受難週
	E. 金曜日: 苦悩と贖罪の日
	イエスの三段階のローマ裁判
タイトル	ポンティウス・ピラトがイエスと二度目の面会を行う

前の朗読 (DJN #316) で見たように、ピラトはイエスを鞭打ち、兵士たちに虐待することで釈放させようとしたが、失敗しました。ユダヤ人の指導者たちは群衆を煽動し、バラバを釈放し、イエスを十字架につけるよう叫びました。

今日の朗読は、指導者たちがイエスに死刑を主張する理由を説明するところから始まりました。彼らがイエスに実際に訴えていたのは、ローマへの反乱ではなく、冒涇でした。イエスは神の子であると主張していたのです。これはイエスの宣教活動の初めから問題となっていたのです。

「そのために、ユダヤ人指導者たちは、イエスが安息日を破っただけでなく、神を自分の父と呼んで、自分を神と等しい者としたので、ますますイエスを殺そうとした。」 (ヨハネ5:18)

イエスは神を名乗ったことは一度もないと主張する人々には気をつけなさい。真実は、イエスは常に自らを神であると自称していたということです。もしイエスが自らを神だと考えていなかったなら、はっきりとそう言っていたはずですし、冒涇罪で十字架にかけられることもなかったでしょう。結局のところ、イエスは真理を宣べ伝えるために生まれたと主張したのです。

ユダヤの指導者たちがイエスに神性を主張したのは正しかった。しかし、この罪でローマに死刑を求めたことは間違っていた。なぜなら、ローマ法ではそのような主張は犯罪ではなかったからだ。また、イエスに対して他の虚偽の告発をしたことも間違っていた。イエスに対する行為によって冒涇を犯していたのは、彼ら自身だったのだ！

ピラトはこの説明を聞いて、ますます恐怖に駆られた。イエスが濡れ衣を着せられているのではないかと心配していたのだ。妻がイエスの義に関する夢の知らせをピラトに伝えていたのだ。

今、イエスの敵たちは、イエスが全能の神、彼らが宇宙を創造したと主張するヘブライ人の神を自称していると告げたのだ。

ピラトはイエスを総督官邸の私室に呼び戻し、何が起きているのか理解しようとした。総督はヘブライの神を信じていなかったが、劣った神を処刑することに加担したくもなかった。

ピラトはイエスの出自について再び尋ねたが、イエスは答えなかった。ピラトはイエスの神性に関する真実を真剣に求めていたわけではなく、神を傷つけたことで自らに呪いを招かないようにしたかっただけだった。ピラトは、ローマ総督として自分が囚人であるイエスに対して完全な権限を持っていることを強調し、イエスを威圧しようとした。しかし、この言葉は偽りだったため、イエスは少しも怯まなかった。

イエスは真実をもって答えました。絶対的な権威を持つのは神だけです。ピラトが振るった権力は、この世のすべての人間の権威を確立する神から、主権的に与えられたものでした。イエスは、神がピラトに権力を与えた方法をギリシャ語の完了形を用いて説明しました。イエスは、起きていることはすべて父なる神の絶対的な計画によるものであり、死を求める群衆の単なる気まぐれや、ユダヤ人指導者の陰謀、あるいはピラトの決定によるものではないと信じていました。ゲッセマネでの祈りの中で、イエスはこのすべてを確信していました。父なる神がしっかりとすべてを支配しておられました。これがイエスの信仰でした。

イエスは罪についても真実を語りました。ピラトは、結果がどうであろうと、神から与えられた権威を用いて正しい決定を下さなかったことで罪を犯していました。しかし、嘘と欺瞞によってピラトを窮地に追い込んだ指導者たちは、より大きな罪を犯していました。彼らにも、ピラトと同様に、自らの行動に責任がありました。このような状況下でピラトの罪について大胆に語ったイエスの姿は、衝撃的です。

神の絶対的な主権と、神の意志に反抗する人間の自由意志というこのバランスは、聖書における完璧なバランスです。両方の真理が完全に作用し、完璧な調和を保っています。神は絶対的な主権を持ち、人間は自由意志を持っています。イエスはこれを信じ、この聖句を含め、何度もそれを真理として宣言しました。そして、自らの命を犠牲にしてそれを成し遂げました。

ピラトは、これほどの真実と知恵をこれまで見たことがなかった。イエスはひどい虐待を受け、甚大な不正の犠牲者となった。群衆をなだめるためだけにピラトが命じた鞭打ち刑もその一つだった。しかし、イエスの動機には何の私利私欲もなかった。その動機は完全に純粹だった。イエスは自己弁護を拒否しながらも、真実のみを語った。イエスは愛そのものだった。ピラトはイエスのような人に出会ったことがなく、これほど感銘を受けた人もいなかった。

総督は、イエスを無罪放免にし、解放しなければならないと確信した。そして、イエスの命を守るために自らの権力を行使することを決意した。問題は、ピラトには神からその権限を与えられていたものの、暴徒の意に反してその決定を貫徹できるだけの誠実さと強い精神力が欠けていたことだった。ピラトは道徳的に弱腰だったのだ。

応用：

イエスの試練の様々な段階を通して、人類史上最悪の状況において、イエスの栄光が示されました。今日はヨハネ19章11節にあるイエスの言葉と態度について黙想しましょう。

あなたは、人生のあらゆる状況（良い状況も悪い状況も）において、あなたの主権者である神の力が働いているのを感じていますか？

イエスは、これまで見た中で最も偉大な信仰は、神の絶対的な権威に対する信仰に基づくものだと言われました。（マタイ8:5-13; ルカ7:1-10）ここでイエスはその信仰を実証されました。

人生において、痛み、悲しみ、不当な扱いなど、あらゆる困難が押し寄せてくる時、神がすべてを支配しておられると信じることは容易ではありませんが、真実です。この信仰こそが、あらゆる理解を超えた平安の基盤なのです。

今日、あなたの人生において、神の権威をどのように肯定し、賛美する必要がありますか？